

総 括

編年的位置づけと中溝パターンについて

山 本 寿々 雄

山梨県遺跡地図（昭和37年）にも未登録の地域である、中溝遺跡の周辺を絶えず注目しつづけ「農村地域工業導入実施計画」の導入実施にあたって関係機関や直接の工事関係者の協力によってこの中溝遺跡を世間にわれることとなったことに対し、すべての関係者に先づ脱帽したい、そして深甚なる敬意を表したいと思う。

その経過については、奥隆行氏が第1章でふれられているのでさけることとし、中溝遺跡が縄文文化中期の最盛期にむけてのタイプ遺跡としてととのった内容をもっている点で今後の研究にはさけて通れない存在となってきた事があげられようかと思うのである。

文字通りのそれこそ一刻を競う緊急調査の直面に立った関係者が一丸となっての協力は四半世紀以上も待ちこがれていた中期縄文文化への解明の手がかりを結果として恵まれ得たことは、よろこばしい限りであり、中溝遺跡が以下述べる編年の空白を埋めるに納得させうるに足るものであると同時に少なくとも中溝パターンを認識する手がかりであることは重要である。即ち研究史上の昭和22～23年にかけておこなった山梨県東八代郡花鳥山遺跡の第一次発掘調査（縄文前期）や北都留郡西原村田和遺跡の調査などは、中期縄文文化研究への足がかりとしてとらえていたものであったが充分に果たせなかった。その後にいたりより地域を拡げた甲信地域に散在する新資料の紹介という形の中で、藤森栄一氏が「中部高地の中晩期初頭縄文式土器」を昭和41年世に問うたことは誠に有意義であった。

勿論この間には、山梨県東八代郡中道町東原の中晩期初頭の縄文式土器を筆者が紹介した（昭和34年）つづいて同町の下向山遺跡が吉田格氏によって報告され（昭和43年）その前年北巨摩郡高根町北割出土の資料について谷口一夫氏が述べている（昭和42年）。

また都留文科大学考古学研究会が同様北巨摩郡発見の縄文中期初頭土器について述べている（宮島了誠、福沢 裕氏）

このような動きを眺めてみると、各々の取組の中において、絶えず止揚され

てゆく努力をつづけながらも今回の中溝遺跡のように、中期縄文文化の最盛期にむけてのまとまった資料は見出せなかつたし、以外と空白を埋めるまでには至らなかつたのが事実である。

かつて報じてみた東原遺跡のものが、長野県諏訪湖沿岸地域では踊場期のものとして理解されてきたし、同八ヶ岳南麓地域では、九兵衛尾根Ⅰとして考へてゐる藤森栄一氏の見解を、南関東との間に山梨県を設けて見た場合、中道町下向山遺跡の位置づけを、南関東の「五領ヶ台」～八ヶ岳南麓の「九兵衛尾根Ⅱ」諏訪湖沿岸の「神殿、唐沢」に併行するものと理解したとき、ここに始めて登場する中溝タイプの編年的位置がその直後に置かれる資料として充分な意義を持つものであると考えている。

そして地形的にみても中溝集落が小形山大原台地の中央部に占地している点は、中期縄文文化を榮えさせた、例えば長野県井戸尻遺跡群に見られるようにより広い台地に集落が降りてくるのと同じであることに気付くのも自然的な環境として充分なものを持ちあわせていたのであろう。

山梨県における中期前半の縄文式土器の編年

諏訪湖沿岸	八ヶ岳南麓	山 梨	(南) 関東
晴ヶ峯式	籠 畑 式	花 鳥 山	
踊 場 式	九兵衛尾根Ⅰ	東 原	五 領ヶ台
梨久保式			
神 殿 式	〃 Ⅱ	下 向 山	
唐 沢 式			
後 田 原	新 道	中 溝	
	貉 沢	柳 田	阿 玉 台
	藤 内 I	北 原	
	〃 Ⅱ		
	井 戸 尻 I		勝 坂
	〃 Ⅱ		
	〃 Ⅲ		

中溝パターンについて

さて以上記したところにより、中溝遺跡のもつ縄文式土器の編年的位置づけが想定されるのであるが、発掘された堅穴住居地が他の堅穴住居址との距離においてもまた、編年的にも大きく離れた位置にないことと。

第2に補修孔を有する土器の一括遺棄がみられること。

第3に土器を含めての遺物が床面のそれよりも上部の覆土（20～50cm）に遺棄されていること。

第4に土偶、玉、耳栓（欠損品）等の装身具類が、住居址内に限って、覆土中を含めて遺存されていることが多いこと。

第5に相対的にみて出土する遺物にアンバラがあること（例4号住居址と3号住居址）（2号住居址と5号住居址）等により縄文人の住居と遺物の放棄（遺存）という事象を類型の中にまとめて整理できるのではないだろうかという考え方を持つにいたり、或種法則性を見出したいと思うのである。

即ち基本的なものとして

〔住居の廃絶〕→〔遺物の廃棄〕

↓（原因の発生）（事物の処理）

〔住居の構築〕

してこれ等のより近接した住居址の間には、土偶及び玉類、耳栓などの装身具が遺存されている例をし住居址はあげられるパターンで、完形土器とか補修孔を有する土器の有無にはかかわらないことをもって類型として整理の方法としたい。ただ従来から土偶等装身具類が、特殊な遺構内からの発見報告があるが特に土偶等、出土状況に不明の点が多い。しかし最近住居址内の床面及び覆土中という例が増加している事実にも注目し住居址内、遺物の在り方等その軸とした。もっとも隣接の小形中山谷遺跡では、配石遺構中に多量の土偶、耳栓、玉類の遺存を確認しさらにその下部層から住居址の検出を見るという事例もあることではあり、住居址内出土の土偶・耳栓・玉等の遺存をめぐるその在り方も中溝パターンの類例の中から解きほぐされてゆくであろうかと考えたからである。

山梨県内の調査例からパターンを求める

I 甲府市上石田遺跡の第1号住居址の2次生活面としてとらえた谷口一夫氏の見解は、中溝パターンの範疇に入るものであり（藤内I～井戸尻II式の土器）この場合の土偶は氏が述べているように畳面を向き立てられた形で遺存されて

いる点（欠損品）注目しておきたい。

なお土器の多くは胴部以下を欠いているが破片であり骨粉が平均して認められたというから或は縄文人のそれであったのかも知れない。近接地に2号住居址を検出している。

Ⅱ 塩山市中萩原重郎原遺跡

36ヶの復元土器の中15ヶが胴部以下を欠いている、土偶を遺存しているらしい、詳細は不明であるが、中溝パターンの範疇に入るものであろう近接地に住居址の確認は不明であるあげておく。

Ⅲ 東八代郡御坂町桂野遺跡

住居址は3ヶ所あり近接する。土偶を住居址内から確認している。胴部以下を欠損する土器が半数を占めている、農道工事の際の発見で要を得ない点もあるが中溝パターンの範疇に入るものと考える。

Ⅳ 薩摩市藤井町坂井遺跡

昭和17年調査の第4地区（北に傾斜した地点の炉址・カ・ヨ・タ址と土偶・土鈴なども中溝パターンの色彩が濃厚である。住居址が接している（4住居址）

隣接の県外の事例について

I 広義の吹上パターン例を報告した東京都多摩ニュータウンM46遺跡の場合。

1号住居・2号住居・7号住居・8号住居に吹上パターンを認めているが、吹上パターンのない3号住居址についてである。

即ち3号住居址覆土中より欠損品の土偶がある。（1号・2号・4号住居址が近接）

II 井戸尻パターンとして認め長野県富士見町井戸尻遺跡（大冊井戸尻所収の遺跡群より）の場合。（すべて土偶を遺存の例から）

（ア）井戸尻2号住居址（3号住居が近接）

（イ）九兵衛尾根2号住居址（1号住居址が近接）

（ウ）ク1号（2号 ク）

（エ）徳久利13号住居址（14号 ク）

（オ）同 1号（9号 ク）

（カ）大花1号住居址（2号・3号 ク）

（キ）ク2号（1号・3号 ク）

（ク）猪沢4号（3号・5号 ク）

等があげられる。このようにして中溝パターンを例えれば広義の吹上パターン

井戸尻パターン外等より再考してみたのであるが、他の遺跡群からも中溝パターンの範疇に入るものがある東京都町田市鶴川遺跡群におけるJ地点11号住居址外がそれであろう。その他集落址を調査された事例の中にも求めたいが誌面の都合もあり、他の機会に譲ることとし、住居址内遺存の土偶・耳栓・玉等の装身具について他の近接住居址との関連において、時間的にも空間的にも追跡する必要があろうかと思う。

そのようなよりどころとなってきた中溝遺跡の総括として敢て中溝パターンを提唱する所以である。

参考文献

- | | | | |
|---------------|------------------------------------|---------------------|-----|
| ① 山本寿々雄 | 銅鐸11号 | | 昭30 |
| ② 同 | 山梨県の考古学外 | | 昭43 |
| ③ 藤森栄一 | 中部高地の中期初頭縄文式土器
—甲信に散在する新資料の紹介— | 富士国立公園
博物館研究報告16 | 昭41 |
| ④ 山本寿々雄 | 山梨県東八代郡中道町
東原の中期初頭の縄文式土器 | 同 2 | 昭34 |
| ⑤ 吉田格 | 山梨県東八代郡
下向山遺跡 | 考古学雑誌
48-3 | 昭38 |
| ⑥ 谷口一夫 | 八ヶ岳東南麓の中期縄文式土器
—高根町北割出土の土器について— | 甲斐考古2
〃 5 | 昭42 |
| ⑦ 宮島了誠
福沢裕 | 北巨摩地方発見の縄文
時代中期初頭土器 | 甲斐考古5 | 昭43 |
| ⑧ 山本寿々雄 | 前掲書②と同じ | | |
| ⑨ 吉田格 | 同 ⑤と同じ | | |
| ⑩ 都留市教育委員会 | 中谷遺跡 | | 昭48 |
| ⑪ 谷口一夫 | 上石田遺跡 | 甲府市教育委員会 | 〃 |
| ⑫ 同 | 山梨県大菩薩嶺西麓出土の
中期縄文式土器 | 信濃21の4 | 昭44 |
| ⑬ 同 | 黒駒発見の中期縄文式土器 | 富士国立公園博物館
研究報告 2 | 昭34 |
| ⑭ 山本寿々雄 | 山梨県の考古学 | | 昭43 |
| ⑮ 志村滝藏 | 坂井 | | 昭40 |
| ⑯ 遺跡調査会 | 多摩ニュータウン遺跡報告7 | | 昭44 |
| ⑰ 藤森栄一 | 井戸尻 | | 昭40 |
| ⑱ 遺跡調査団 | 鶴川遺跡群 | | 昭47 |